

## 指導教員によるコメント

山本里花さんは、本学の博士後期課程2年生ですが、すでにアメリカと日本での音楽療法研究の実績を持ち、学会等でも高く評価されています。今回の海外アカデミック・ディスカッションのプロジェクトによって、音楽療法の先進国であるアメリカ合衆国の最先端の研究機関を訪れ、現在中核となって研究および臨床に関わっている研究者や音楽療法士の方々と、臨床を踏まえた議論が行なえたことは、大変有意義であったと評価できます。音楽療法の分野は一定の手法によってカバーできるものではなく、セラピスト自身が対象者とそのつどの時間と場所で、そのつどの関係を構築しながら、質的リサーチを積み重ねてゆくものである、ということが、山本さんの研究姿勢からうかがうことができます。人と人との直接的に関わりを持つ、その時に、その関係がいかに質的であるのか、様々な関係性の中でもどのようにあることが、質的に「その次の」局面へと進めることができるのか、そして、音楽はその「場」においてどのような意味を持ちうるのか、あるいは音楽にどのような意味を与えることができるのか、など問いは尽きることがありません。

しかしながら、山本さんは今回の海外アカデミック・ディスカッションにおいて、たしかに手応えを感じたとともに、それを単に受容するのではなく、自らの療法士としての、そして日本の文化的コンテクストの中で、民族音楽学の成果をも踏まえて、日本から発信できる音楽療法の新たな質的リサーチを見いだすための、基盤を得たと考えられます。

今回の成果が山本さんの博士論文に結実し、日本の音楽療法のみならず、世界の音楽療法に対しても、その「根」の部分で大きな貢献をすることが期待されます。

**永原 恵三（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授）**